42　病床を訪れて　　昭和四年　二月

午後三時、肺患の方が、私を恋しがって度々電話で招かれるのでお話に行った。相好も変われば元気もない。其の人の話に依れば、

御三部経も読めるようになり、御和讃も御文章も拝読さして戴いて、こんなに有難い事が書いてある、参らせて戴く事に間違いないと喜んでいましたが、命が旦夕に迫って見れば、いくら有難いものを並べて見ても、喜ばない心がいます事に気が付きましたが、何とかなりませんか。　それが聞きとうてなりませんから何卒御願いいたします。

私が生血を絞る様な思いで話をさして戴くのは、その動かん心が有るからです。尋常の時は素直な感情に誤魔化されて有難がっているけれども、臨終の関所に近寄るに従って、御聖教の文面だけで満足していた人は、他人の花を眺めて喜んでいたのだから不安が出て来るのは当然です。それが疑いの親玉で、真剣の時でなければ疑いは出て来ないのです。奥底の気持ちの悪い心が何とかならないかと悶える姿は自力の働きで、自力の動いている間は　堕ちはせぬかの疑いは晴れてはいないのです。疑いがあるから先が暗いのです、気持ちが悪いのです、不安なのです。その心は永劫治らないから、其の儘をお助け下さると安心せよと、人様は教えられるけれども、それは他力によく似た自力です。

何故かと言えば、治らない心とお助けを並べて置いて、安心を上に乗せるのであって、癒らない機が今お助けに逢うて疑いが晴れなくては、法を聞いた所栓がありません。何ともなれないままで往生する事と安心せよと教えれば、疑いながらの往生と言う事を暗々裏に勧めている事になります。

親に逢うたのなら、疑い晴れなければ平生業成とは言われません。現在で往生は一定と大満足を得て、堕ちるに間違いがない、助かるに疑いがないと慶び抜く境地が有ります。それが自力を捨て、他力に帰したと言うのです。

貴殿の心は散り乱れて、更に統一がありません。見れば見る程、聞けば聞く程、苦悩の心は増すばかりで、消す事も出来なければ払い除く事も出来ません。火の車に引きづられて、三界の火坑に邁進するばかりであります。この場になっては、聞いたのも覚えたのも知ったのも悉く役に立ちません。出離の縁は微塵もなく、助かる所は兎の毛の先でついた程も有りません。私の言葉でなく、御聖教の文句でなく、貴殿自身の心の望みの綱の切れた時、総てを赦す御親の念力に摂取されて、疑いなく慮りなく往生さして戴くのです。

50　信の一念

信の一念！　永劫待ち続けたみ親と、流転を続けて来た私とが名乗りを上げた一刹那だもの、言わずにおれるものか、叫ばずにおれるものか、此の一念こそ、八万の法蔵を受取り渡しする水際であり、仏智満入の時尅ではないか。人様は私が余り信の一念を言い過ぎると言わるるけれども、声の続くかぎ生命の終るまで叫ばずにはいられない。本願成就の文には「信心歓喜乃至一念」と言い、三輩の文にも「歓喜信楽不生疑惑乃至一念」との給い、付属の文にも「踊躍歓喜乃至一念」とあるではないか。聖人様の信巻の真髄は信の一念に納まり、口伝鈔も、最要鈔も、本願鈔も改邪鈔も、特に御文章には六十五回も一念一念と仰せられてあるではないか。此の一念は水を飲んだような呑気な一念ではないぞ。無量永劫生き抜く開発の一念じゃもの、真剣でなくて如何して得られよう。

口伝鈔には「如来の大悲短命の根機を本とし給えり、もし多念をもて本願とせば、いのち一刹那につづまる、無常迅速の機いかでか本願に乗ずべきや。されば真宗の肝要一念往生をもて淵源とす。乃至これらの文証みな無常の根機を本とする故に、一念をもて往生治定の時刻と定めて、いのちのぶれば自然と多念におよぶ道理をあかせり。されば平生の時一念往生治定の上の仏恩報謝の多念の称名となろうところ、文証道理顕然なり」と、

最要鈔には「無始よりこのかた生死に輪廻して出離を怖求し、ならいたる迷情の自力心、本願の道理をきくところにて謙敬す

れば、心命つくるときにてあらざるや。そのとき摂取不捨の益にもあづかり、住正定聚のくらいにもさだまれば、これを即得往生というべし。善悪の生処をさだむることは、心命のつくるときなり、身命のつくるときにあらず。しからば臨終を期すべからざる義、道理文証あきらけし。信心歓喜乃至一念のとき、即得往生治定ののちの称名は仏恩報謝のためなり」と、本願鈔には「一念歓喜のおもひおこるにつきて往生たちどころにさだまるを正定聚のくらいに住するともいい、かならず滅度にいたるともいい、摂取不捨の益にあづかるときともいふなり。このときすなわち凡夫自力の心のつくるときなれば、こころのおわりともいふべし」と、

改邪鈔には「この娑婆生死の五蘊所成の肉身いまだやぶれずといへども、生死流転の本源をつなぐ自力の迷情、共発金剛心の一念にやぶれて　乃至　即得往生ともならひはんべれ」と、その他「一念をもては娑婆のおわり臨終とおもへ」とか、御文章には「これを知らざるをもて他門とし、これを知れるをもて真宗のしるしとす」とも仰せられてあり、又「十人は十人ながら、百人は百人ながら」と仰せらるる前後には、必ず「一念の信定まらん輩は」と銘が打ってあるにも関わらず、何時とはなしに此の関所を通ろうとするのは、魂の抜けた人形の信仰にも等しいではないか。未来永劫浮くか沈むか、迷うか悟るか、八万の法蔵を反古にするか読み破るか、仏願に生きるか生きぬか、仏教に背くか合うか、諸仏の証誠を生かすか殺すか、たったこの信楽開発の一念に在るのではないか、真仮権実、信前信後の水際もこの一念で分れるのではないか、総てを生かすも殺すも此の信の一念に定まるのではないか。真宗の肝要は平生の時、この一念を突破し、即得往生して置かなければ往生は不定だぞ。